

特集：子どもの文学の一年

● 総論

大阪国際児童文学館の消滅

二〇〇九年の児童文学・児童文化

長谷川 潮

1 価値を知るのは少数者だった

二〇〇九年十二月二十七日（日）は、大阪府立中央図書館に吸収されることになった大阪府立大阪国際児童文学館（以下、〈児童文学館〉）の最後の開館日だった。世界でも

有数の価値を持つ〈児童文学館〉が簡単に廃止されたのであって、これは、ほとんど文化的な暴挙として歴史にとどめておかなければならないできごとである。

もっとも、寄贈した大量の資料の返還請求裁判が鳥越信らによって起こされていて、二〇一〇年二月末現在、裁判の決着はついていない。〈児童文学館〉が最終的にどういうものになるのかは不明であるが、これまでのような活動を維持することは不可能と思われる。

本誌（『日本児童文学』）二〇〇九年三―四月号は「すごいぞ 大阪国際児童文学館」という同館館長向川幹雄のコラムを掲載したが、向川は「こうしたすばらしい児童文学館を、金がないから潰すというのは、あまりに安直な考えではないでしょうか」と抗議した。「金がないから潰す」という論理は、むしろ〈児童文学館〉だけを対象にしたものではなく、危機はさまざまな分野に広がっている。

さて、コラム「すごいぞ 大阪国際児童文学館」は、そのあと二〇〇九年十一月―十二月号まで五回にわたって連載